



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カール. ヨーハン. マキシモヴィツチの伝
Author(s)	宮部, 金吾; Kingo, Miyabe
Citation	札幌博物学会会報, 1(1), 1-9
Issue Date	1906-06-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60760
Type	journal article
File Information	Vo.1No.1_001.pdf





C. J. Maximowicz

カール・ヨーハン・マキシモヴィツチの傳

宮 部 金 吾

(肖像附)

CARL JOHANN MAXIMOWICZ.

BY KINGO MIYABE.

(With a Portrait).

泰西の植物學者にして本邦の植物を研究したる者多しと雖も、露國の**カール・ヨーハン・マキシモヴィツチ**氏の如く綿密周到なる研究を爲せし者は恐らく他になかるべし。吾人自國の植物を研究するに當り、同氏の研究したる跡を釋ぬるに、其記事の明亮にして斷案の正確なるに、不知不識快感と敬信の念の興るを覺ゆ。本邦の植物を廣く植物學界に紹介せし歐米の植物學者中、親しく我國土に渡來して、其研究に従事せし者は、氏を外にしては僅かに**ツンベルグ** (Thunberg)、**ジーボルト** (Siebold)、**サバチエ** (Savatier)、**チエルマン** (Kjellmann)等あるに過ぎず、他は皆採集家の齎したる材料に就て、其自國に於て研究したる者のみなり。然れども**マキシモヴィツチ**氏の如きは、今より凡四十有五年前、奮つて我國に渡來し、函館、横濱、長崎の三所に三年有餘を費して、其地方の植物を採集考査し、歸國の後も尙ほ其忠實なる從僕**須川長之助**をして、本邦各地の植物を採集せしめ、斯くして得たる豊富なる材料を死に至る迄研究して、本邦植物學史上に湮滅すべからざる深濃なる印章を残したり。

予は明治二十二年の夏、米國より歐州を経て歸朝するに當り、殆んど二週日の間、聖彼得堡帝國植物園内に於ける同氏の家に客

となり、親しく其讐咳に接し、且つ同氏の研究に従事する實況を目撃するの榮を得たり。

斯かる密接なる關係を、我が植物學界に有する、同氏の經歷を世に紹介するは極めて有益なる事と信じ、今茲に札幌博物學會會報を發行するに當り、同氏の略傳を記する事とせり。傳中記載するところの事實はアツシエルソン(Ascherson)及ヘムスレー(Hemsley)兩氏に負ふ所多しと雖も、予が親しくマ氏より聞知したるものにして、未だ世に公にせられざるもの亦尠しとせず。

マキシモヴツチ氏は純粹なる露西亞人にして、千八百二十七年(文政十年)十一月二十三日、莫斯科府より遠からざるツラ(Tula)と稱する一市に生る。父は醫を以て業となし、性極めて植物學を愛好せり、而して其愛兒を植物學者たらしめん爲めに、家庭教育の方針は全く植物に對する嗜好心を發揮せしむるにありしを以て、其邸内に花園を作り、多くの草木を培養し、愛兒をして其寫生をなさしめたり、余がマ氏の家に在りし時、氏は余に一書を示して曰く『是れ余が幼年の頃寫生せしものを、我父が故らに我が爲めに自から製本せられしものなり』と。

氏は實に斯かる特殊の教育によりて、精細に事物を觀察考査するの性を成したるものにして、他日植物學界に雄飛するの基礎も、亦實に茲にありしと思はる。氏が最初に學業を修めたる學校は露都の獨乙新教派に屬するセント、アン學校にして千八百四十四年に之を卒業し、更に進んで醫學を修むる爲めにドルバット大學に入れり。

ドルバット大學には當時有名なる植物學者アレキサンデル、ブンダ(Alexander Bunge)教鞭を執り居り、蒙古及び北部支那の植物研究に従事中なりき。青年なるマ氏は同教授に就き植物學を研究せる間に、其の強き感化を受け、自から東亞の植物に興味を感し、遂に醫學を捨て、植物學研究に一生を捧ぐるの念を起したり。

氏此校に於て業を卒ふるや、千八百五十年同大學植物園の副長に任ぜられ、ブンダ教授の事業を助くること三年、千八百五十二年露都帝國植物園腊葉室係員に轉任し、千八百九十一年氏の死に至る迄て此植物園とは密接なる關係を絶たざりき。

千八百五十三年露國政府は軍艦デアナ (Diana) をして世界を週遊せしめ、廣く學術上の探檢をなさしむる事を企圖せり。マ氏は植物學者として同艦乗込を命せられ、同年秋其の本國を出帆せり、時に氏二十六歳なりき。

軍艦デアナは南米、伯西見のリオ、デ、ジャネイロ、智利のヴァルパライソ及び布哇のホノル、等に到り、更に轉じて東部西比利亞沿岸州に於けるデ、カストリー灣に入港せり。是れ實に千八百五十四年七月二十三日にして、此處に於て初めてクリミヤ戰爭の起りし事を聞知せりと。而してデアナは特別なる勤務を命ぜられたるを以て、マ氏は其地に上陸し黒龍江方面の植物探檢に従事する事となれり。斯く本國の災厄は却つてマ氏に取り、又と得難き好機會を與へぬ。氏は此新領土に留ること凡そ三年、備さに艱難辛苦を嘗め、充分に其探檢採集を遂げ、千八百五十七年三月同地を出發し西比利亞を横りて露都に歸りたり。此時より氏は一切の事業を抛擲し、専心黒龍江州より齎らし歸れる標本の調査に従事する事二年、其結果として *Primitiæ Floræ Amurensis* 黒龍江地方植物志を世に公にせり。

此書は露都帝國科學會より出版せられしものにして、五百餘頁の「クワター」大冊をなし、附するに圖版十枚及地圖一葉を以てし、各論に於ては、九百十五種の分布形狀等を詳記し、總論に於ては、黒龍江方面の地理、氣象、樹木の分布、植物帶、植物の統計、近隣「フロラ」との比較、有用及培養植物、人爲に依り「フロラ」の性質に及ぼせし變化等を精細に論し、又附録として北京及蒙古産植物目錄を掲げたり。此書は一地方の植物志の模範たるものにして、氏は實に之れに依りて植物分類學者、植物地理學者及學術探檢者としての名聲の基礎を固く置き

たりき。

當時**デミドフ** (Demidoff)なる富豪あり、學術上の大著述に賞金を贈る事を公にせしが、**マ**氏の著書其撰に當り賞金を得るに至れり、氏は之を以て、再び滿洲地方の探檢を試み又日本に渡航するの決心をなし、千八百五十九年露都を發し、南方西比利亞を経て黒龍洲に達し、ウスリ及スンガリー支流地方の植物調査を遂げ、千八百六十年(萬延元年)の秋我が函館に到着し、同地に留まること一年有餘、其附近の植物採集及調査に従事したり。又函館滞在中須川長之助を僕となし、竊くるに植物採集の方法を以てし、又採集旅行には必ず同道せしむることとせり。斯く永く一ヶ所に滞在したるは其地方の植物を最も完全に研究せんが爲にして、氏の如きは實に時日を惜まずして、専ら事業の完からん事を冀圖したる者と云ふべし。氏は又單に植物標本を採集せしに止まらず、新鮮なる花實を解剖して、其綿密なる寫生圖を製し、色、香の如き變し易き諸性質は悉く之れを細記し、圖と共に標本に添附したり。

文久元年の秋函館を出帆し横濱に趣き、同港に留まること四十餘日にして長崎に渡航し、翌年春再び横濱に出て、秋復た長崎に歸る。時恰も鎖國攘夷の説盛に行はれ、浪人横行し、外人の最も危険を感じたる時なりし。彼の生麥事件の如きも氏の横濱滞在中に起りし出來事にして、氏の語られし所に依れば、他の外人と共に一時は武裝し、死を決して戦はんとせられし由。

文久三年即ち千八百六十三年は長崎に殆んど全一年を費し、其地方の植物を究査したり。長崎居留地より數里以外の地には旅行を許されざりしを以て函館より伴ひ來れる長之助に命じて九州各地方、特に高山の植物を採集せしめたり、此者能く主人の意を奉じ、忠實に氏の事業を助けたり、故に氏は其勞に酬ひんが爲めに長之助の名を附したる植物の數頗る多し。

同年の末許多の腊葉及び植木類を齎し帆前船に乗し長崎を出

帆し、喜望峯を廻りて、翌千八百六十四年本國に歸着したり。此行たるや氏の探檢旅行の最終にして、爾後三十年間一意東亞植物の研究に従事し、千八百六十六年以降續々其結果を公にせり。

千八百六十九年露都帝國植物園の學術部長(Head Botanist)に榮進し、死に至る迄で此職に忠勤なりき。又千八百七十一年に露都帝國科學會の正會員に推舉せらる、是れ露國の學者として最大の名譽とする所たり。

千八百八十四年露都に植物學及園藝學萬國會議開催せられし時、本邦よりは田代安定氏派遣せられ同氏が琉球諸島に於て採集せられたる標本、及東京帝國博物館員及田中芳男氏の採集せられしものを齎らして、マ氏の調査を仰きし以來、本邦の植物學者にして同氏に標本を送りて其鑑定を請ひたる者は、矢田部良吉氏、松村任三氏、牧野富太郎氏、伊藤篤太郎氏及予にして、其研究の結果は *Diagnoses Plantarum Novarum Asiaticarum*. VI-VIII. (1886-1893). 中に發表せられたり。

又露國の探檢者プルツエヴァルスキー (Przewalsky) 及びポタニン (Potanin) の東部中央亞細亞及び支那の内部に於て採集したる植物標本は、悉くマ氏の手に乗ねられ、其研究を仰ぐ事となれり。其結果の一部は發表せられしも、其完成を見るに至らざりし。

氏の研究の方法は、事物を根本的に精査するにありて、決して其結果を公にするに急ならず、充分に時を費し、研究に研究を重ね、初めて出版するを常とせり。故に一度ひ氏の調査を経たる植物の部類は明確に整理せらるゝを以て、後進者をして其進路の平坦なるを深く感せしむ。又氏は羅典及希臘語の外、獨、佛、英の語に通し、自由に此等によりて會話且つ著述するを得たり。

氏は晩年、日本植物志を編述するの志を立て半は其緒に就きしに終に其目的を達せずして永眠せられたり。氏の余に語られし所に依れば『余も既に老年に達し、餘命もなかるべければ、大規模の日本植物志を著すこと叶ふまじ、殊に友人等の勧めもあるに依り、約

二年にて完成する程度を以て着手する積なり』と、而して各科及屬に其性質を著はすに必要なる圖書を挿む計畫にして、其圖書の如きも過半準備しありたり、天若しマ氏に假すに尙ほ數年の日月を以てせば、吾人は此大著述を手にするを得て、至大の利益と光明とを得たりしならん。

氏は外貌強き威嚴を備へ、一見近づき難き趣あるも、一度近く接すれば、其外觀の下に親切厚情の満ち溢るるを認むるに難からず。氏は多くの親友を有し、又常に世人の敬愛を受けたりし、氏の後進者に對し親切にして且つ懇篤に其誘導に勧められし一例を掲げんに、余が曾て千島植物志を著はさんとするに當り其企圖を同氏に報したりしに、氏答て曰く『余は 1868 年以來カムサツカ植物目録を編せんが爲め當地植物園及「アカデミー」附屬腊葉室の標本を検査するに當り、千島に於て採集されたる標本を見當る毎に記載し置きたるもの茲に百九種に達せり、之れを貴君に呈す宜しく自由に此を使用せられん事を望む』と且つ尙ほ附記せられし處に依れば、過去十年間數十萬の標本中より、此等少數の千島植物を見出したるは、恰かも牧草中に針を索め得たる感ありしと。

氏は千八百九十一年二月十六日露都帝國植物園内官舎に於て流行性感冒に侵され、餘病の發する處となり、遂に逝去せらる、行年六十四歳なりし。

予の氏の家に客たりし時、夫人及令嬢より最も懇切なる待遇を受けたり、夫人は親切溫雅なる貴婦人にして能く佛、及ラキンランド語に通じ、令嬢は頗ぶる賢明快活にして英、佛、獨語を能くし、露都一病院の醫師ドクトル、ルーニン (Dr. Lunin) 氏に嫁せらる、又一人の令息ある由なれども面會することを得ず、且つ又其消息をも知るを得ざりし。

マキシモヴィッチ氏著述目録

1859.—Primitiæ Floræ Amurensis. Mit 10 Tafeln und einer Karte. S. 1-504. (Memoires de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Petersbourg. VII^e Série. T. IX.)

1861.—Golowninia, eine neue Gattung der Gentianeen. Mit 1 Tafel. (Mélanges biologiques. T. IV. p. 37-44).

1866.—Rhamneæ Orientali-Asiaticæ. Cum tab. 1. pp. 20. (Mem. Acad. Imp. d. Sciences de St.-Petersb. T. X. No. 11).

1866.—Diagnoses breves Plantarum novarum Japoniæ et Mandshuriæ. Decas I. (Mél. biol. T. VI. p. 19-26).

1867.—*Ditto*. Decas II-VI. (Mél. biol. T. VI. p. 200-205, p. 206-214, p. 258-276, p. 367-376).

1867.—Revisio Hydrangearum Asiæ Orientalis. Cum 3 tab. pp. 48. (Mem. Acad. Imp. Sc. St.-Petersb. T. X. No. 16 et dernier).

1870.—Rhododendreæ Asiæ Orientalis. Cum 4 tab. pp. 53. (*Ditto*. T. XVI. No. 9.)

1870.—Ophiopogonis Species in Herbariis Petropolitans servatas exposuit. (Mél. biol. T. VII. p. 320-331).

1870.—Diagnoses breves Plantarum novarum Japoniæ et Mandshuræ. Decas VII-VIII. (Mél. biol. T. VII. p. 332-342, p. 553-564).

1871.—*Ditto*. Decas IX-X. (Mél. biol. T. VIII. p. 1-21, p. 367-421).

1871.—Ein Nachtrag zu meiner Abhandlung "Rhododendreæ Asiæ Orientalis." (Mél. biol. T. VIII. p. 150-167).

1871.—Einfluss fremden Pollens auf die Form der erzeugten Frucht.—St.-Petersb.

1872.—Diagnoses Plantarum Novarum Japoniæ et Mandshuriæ. Decas XI-XIII. (Mél. biol. T. VIII. p. 506-562, p. 598-650, T. IX. p. 1-30. pl. 1).

1873.—*Ditto*. Decas XIV-XVI. (Mél. biol. T. IX. p. 31-76, p. 148-188, p. 214-270).

1873.—Synopsis Generis Lespedezæ, Michaux. pp. 59. (Festo semisaeculari horti Imperialis botanici Petropolitani, die 22 Martü 1873 celebrato, praesentata).

1874.—Diagnoses Plantarum Novarum Japoniæ et Mandshuriæ. Decas XVII-XIX. (Mél. biol. T. IX. p. 281-374, p. 394-452).

1876.—*Ditto*. Decas XX. (Mél. biol. T. IX. p. 581-660. pl. 1.)

1876.—*Adumbratio specierum generis Chrysosplenii* L. (Mél. biol. T. IX. p. 757-771).

1876.—*Diagnoses Plantarum Novarum Asiaticarum*. I. (Mél. biol. T. IX. p. 708-831).

1877.—*Ditto*. II. (Mél. biol. T. X. p. 43-134).

1879.—*Ad Floræ Asiæ Orientalis cognitionem meliorem fragmenta*. pp. 73.

1879.—*Adnotationes de Spiraeaceis*. pp. XI, 156.

1880.—*Diagnoses Plantarum Novarum Asiaticarum*. III. (Mél. biol. T. X. p. 567-741).

1881.—*Ditto*. IV. (Mél. biol. T. XI. p. 155-350. pl. 1),

1881.—*De Coriaria, Ilice et Monochasmate, hujusque generibus proxime affinibus Bungea et Cymbaria*. Cum tab. 4. pp. 70. (Mem. Acad. Imp. Sc. St.-Petersb. T. XXIX. No. 3).

1881.—*Ueber J. J. Rein, Japan nach Reisen und Studien*. (Bot. Zeit. Bd. XXXIX. S. 272-277).

1883.—*Diagnoses Plantarum novarum Asiaticum*. V. (Mél. biol. T. XI. p. 623-876. pl. 3).

1884.—*Sur les collections botaniques de la Mongolie et du Tibet septentrional (Tangout) recueillies récemment par des voyageurs Russes et conservées à St.-Petersbourg*. (Bull. du Congrès international de botanique et d'horticulture à St.-Petersbourg. p. 1-196).

1885.—*Amaryllidaceæ Sinico-Japonicæ*. (Engl., Bot. Jahrb. Bd. VI. p. 75-81).

1886.—*Spiraea bullata* Maxim. (Gartenflora, Bd. XXXV. p. 65-66).

1886.—*Diagnoses Plantarum novarum Asiaticarum*. VI. (Mél. biol. T. XII. p. 415-572).

1888.—*Ditto*, VII. (Mél. biol. T. XII. p. 713-934. pl. 4.)

1889.—*Plantæ Chinenses Potaninianæ nec non Piasezkianæ. Thalamifloræ et Discifloræ*. (Acta Horti Petropolitani. Vol. XI. p. 1-112).

1889.—*Enumeratic Plantarum hucusque in Mongolia nec non adjacentē parte Turkestanicæ sinensis lectarum. Fasc. I. Thalamifloræ et Discifloræ. Cum tab. 14. pp. IV, 138.*

1889.—*Flora Tangutica, sive Enumeratio Plantarum regionis Tangut (Amdo) Provinciae Kansu, nec non Tibetiæ praesertim orientaliborealis atque Tsaidam. Ex collectionibus N. M. Przewalski atque G. N. Potanin. Fasc. I. Thalamifloræ et Discifloræ. Cum tab. 31. pp. XVIII, 110.*

1890.—Supplementum ad Maximowiczii Diagnoses plantarum Asiaticarum, VII. (Mél. biol. T. XII. p. 935-938. pl. 3).

1892.—Diagnoses plantarum novarum Asiaticarum. VIII. p. 1-41.

